

## 典礼における歌唱と所作について

西脇純（聖グレゴリオの家講師）

### 1. はじめに——ローマ・カトリック教会の典礼理解

#### ◆典礼という言葉

「典礼 liturgia」の原語「レイトウルギア λειτουργία」は、本来「（兵役など）公への奉仕、務め、援助」を指したが、70人訳聖書で祭司階級レビ族の司った礼拝を指す用語になり、これが東方教会に受け入れられてキリスト教典礼を指す言葉として用いられるようになった。

他方、新約聖書では厳密な意味でのキリスト教の典礼集会を指す例は使徒言行録13:2のみで、他は「ユダヤ教の祭司の務め」（ルカ福音書1:23ほか）「援助の務め」（コリントの信徒への手紙二9:12ほか）「宣教奉仕」（フィリピの信徒への手紙2:17ほか）などを意味した。

西方教会では「務め」を指す「ministerium」「officium」あるいは祭礼（の執行）を指す「celebratio」「sollemnitas」などの用語が使われていた。「liturgia」は16世紀以降の人文学者たちが用い始め、当初はミサのみを、次第に典礼一般に適用されるようになった。ローマ・カトリック教会の公式文書には1917年の『教会法典』で初めて用いられた（1257条「sacra liturgia」）。英語では「worship」「service」ドイツ語では「Gottedienst」という用語で表されることがある。

日本語ではローマ・カトリック教会が「典礼」を用いるほか、「礼拝」「公同礼拝」（プロテスタント）、「奉典礼」「奉神礼」（正教会）などの訳語が知られている。

#### ◆典礼とは？

キリスト教の典礼は何のためにあり、典礼では何が行われているのだろうか？ローマ・カトリック教会では、典礼は「神の民（信者）が神のみわざ（opus Dei）に参加すること」とされている（『カトリック教会のカテキズム』1069項参照）。以下、教会公文書を抄読してみる。

キリストは「人間をあがない、神に余すところなく栄光を帰するわざ」を、自らの「幸いな受難、死者のうちからの復活、栄光ある昇天という過越の神秘（mysterium Paschale）によってなし遂げた。」（『典礼憲章』5条）

N.B. 過越の神秘：キリストの十字架死、復活、昇天によって、全人類が死から（神の）いのちへの過越しに招かれるに至った出来事を指す（『カトリック教会のカテキズム』1067項）。

「このキリストの過越の神秘を」「告げ知らせ祝い」、信徒らが自ら「この神秘を生き、世にあってこれをあかしするために」典礼が営まれる（『カトリック教会のカテキズム』1068項）。

典礼において信者は、「『聖書全体にわたり、ご自分（＝キリスト）について書かれていることを』（ルカ福音書24:27）読み（legere）、『主の死の勝利と凱旋を現す』（『聖体についての教令』1551年）感謝の祭儀（＝ミサ）をささげ（Eucharistiam celebrare）、同時に、キリスト・イエス

において、『ことばでは言い尽くせない贈り物について神に』（コリントの信徒への手紙二 9:15）感謝し（*gratias agere*），聖霊の力によって『神の栄光をたたえる（*laudare*）。』（エフェソの信徒への手紙 1:12）」（『典礼憲章』6条）

「これほど偉大なわざをなし遂げるため、キリストはつねにご自分の教会とともにおられ、とくに典礼行為（*actio liturgica*）のうちにおられる。[...] キリストはご自身のことばのうちに現存しておられる（*praesens adest in verbo suo*）。聖書が教会で読まれるとき、キリストご自身が語られるからである。最後に、教会が嘆願し（*supplicare*），賛美を歌うとき（*psallere*），『二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである』（マタイ福音書 18:20）と約束なさったキリストが現存しておられる（*praesens adesse*）」（『典礼憲章』7条）。

N.B. キリストの現存：キリストが現存する典礼行為として、『典礼憲章』7条はほかに「ミサのいけにえ」「奉仕者（=司祭）の任務」「聖体の両形態」「諸秘跡の授与」をあげている。

「典礼は教会の活動（*actio ecclesiae*）が目指す頂点であり、同時に教会のあらゆる力が流れ出る源泉である。」（『典礼憲章』10条）→典礼行為（*actio liturgica*）と教会の活動（*actio ecclesiae*）の関係が述べられている。

「地上の典礼（*liturgia terrena*）において、われわれは天上の典礼（*liturgia caelestis*）を前もって味わってこれに参加している（*praegustando participare*）。天上の典礼は、旅するわれわれが目指す聖なる都エルサレムにおいてささげられており、そこにはキリストが、聖所と真の幕屋の奉仕者として神の右の座に座しておられる（黙示録 21:2, コロサイの信徒への手紙 3:1, ヘブライ人への手紙 8:2）。われわれ（地上で典礼を営む者）は、天のあらゆる軍勢とともに主に栄光の賛歌を歌い（*cum omni militia caelestis exercitus hymnum gloriae Domino canimus*），聖人たちの記念を尊び、彼らの交わりにあずかることを望み、われわれのいのちであるキリストが現れ、われわれもキリストとともに栄光のうちに現れるときまで、救い主、われわれの主イエス・キリストを待ち望むのである。」（『典礼憲章』8条）

N.B. 栄光の賛歌：「天のあらゆる軍勢とともに主に栄光の賛歌（*hymnus gloriae*）を歌う」という表現は、ミサの「叙唱 *praefatio*」と呼ばれる司祭の祈りの結びからの引用である。例えば、主の降誕の主日の叙唱の結びは「神の威光をあげ権能を敬うすべての天使とともに、わたしたちもあなたの栄光を終わりなくほめ歌います」となっており、下線部の原文のラテン語は典礼憲章の表現とほぼ一致する「*cumque omni militia caelestis exercitus, hymnum gloriae tuae canimus*」（イタリックが合致部分）。

#### ◆七つの秘跡、準秘跡、そのほかの典礼

典礼はキリストの現存を前提としており、その意味でキリストがはたらく場でもある。キリストのはたらき、すなわち典礼を通してキリストが授与する恵みを「秘跡 *sacramentum*」と呼ぶ。ローマ・カトリック教会は「七つの秘跡」を認め、伝承してきている。「洗礼」「堅信」「聖体」「病者の塗油」「ゆるし」「結婚」「叙階」の七つである。典礼には、これらの秘跡を執行する儀式という側面がある。

これらのうち、最も重要とみなされている秘跡は「聖体」である。「聖体の秘跡」を執行する典礼が「ミサ」と呼ばれる儀式である。ミサが最重要視されるのは、典礼には「過越の神秘を生き、

これを告げ知らせる」という本懐があるためである。「ミサ」の秘跡制定句後の応唱は「主の死を思い、復活をたたえよう、主が来られるまで」となっており、典礼の本質を端的に言い表している。

このほかにも、準秘跡と呼ばれる典礼がある。物の祝福（食事、車、メダイなど）や修道誓願式など人への祝福、さらには祓魔式も準秘跡に数えられる。十字架の道行き、ロザリオの祈りなどの信心業も広い意味で典礼といわれる場合がある。

葬儀は秘跡でも準秘跡でもないが、主要な典礼である（葬儀がミサを伴って行われる場合もある。また、葬儀のなかで行われる祝福は準秘跡である）。葬儀は「死の日に秘跡的生活の終点に達した信者の「栄光のうちに復活するであろうからだの種子を希望のうちに埋葬」する儀式である（『カトリック教会のカテキズム』1682-3項、コリントの信徒への手紙一 15:42-44 参照「朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものに復活し、卑しいもので蒔かれ、栄光あるものに復活し、弱いもので蒔かれ、力あるものに復活し、自然の体で蒔かれ、霊の体に復活します。」）。

## 2. 典礼における所作と歌唱

### ◆モノ、所作、ことば

秘跡をはじめとする典礼には、パン、ぶどう酒、水、油（洗礼志願者の油、聖香油、病者の油）、ろうそく、香など、さまざまなモノがしるしとして用られる。

キリスト教は、しるしを使用することの妥当性の根拠を聖書のうちに見出している。「神は人間に、見えるものを通して語り」「人間の知性は物質的な世界を見て、創造主の痕跡を読み取る」ことができる（『カトリック教会のカテキズム』1147項、ローマ人への手紙 1:20、使徒言行録 14:16-17）。

イエスも宣教の際「物的しるし（*signa materialia*）、あるいは象徴的な動作（*gestus symbolici*）でいやしを行ったり、教えを強調したり」していた（『カトリック教会のカテキズム』1151項）。

そこで、キリスト教典礼も、「被造物と人間文化の諸要素とを取り上げ、これに、イエス・キリストによる新しい創造という恵みのしるし（*signa gratiae*）の尊厳を与えて、それらを統合し、聖化」する。（『カトリック教会のカテキズム』1149項）→洗礼儀礼が新生のしるしであるといわれる場合など（コロサイの信徒への手紙 2:12）。

合掌、按手、お辞儀、十字架のしるし、起立、着席、沈黙、傾聴などの所作は、典礼においてキリスト教信仰のしるしとして行われる。

しかし、最大のしるしは所作（動作）と結ばれたことばであろう。それは、典礼において「動作とことばを介する対話という形で *dialogus, per actiones et verba*」「キリストと聖霊とにおける神の子らの御父との出会い（*occursus*）」が表現されると考えるからである（『カトリック教会のカテキズム』1153項）。

「いうまでもなく、象徴的動作自体がすでに一つの言語ですが（*actiones symbolicae sunt iam ipsae dictio quaedam*）、神の国の種がよい土で実を結ぶには、さらに神のことばと信仰による応答とが動作の一つになって、それ（動作）を生かす必要があります。（*requiritur Verbum Dei et responsionem fidei has comitari et vivificare actiones*）典礼の動作は、神のことばが表すことを意味するとともに、神の恵みの働きと神の民の信仰による応答をも意味します。」（『カトリック教会のカテキズム』1153項）

「典礼で用いられることばと動作 (liturgicum verbum atque liturgica actio) は、しるしとそのしるしが意味するものという観点で切り離すことができないものですが、さらに、その意味することを実現させるものという観点でも、切り離しえないものです。」(『カトリック教会のカテキズム』1155 項) → 聖霊のはたらきによってしるしが指し示すものが実現されると考える (同)。→例えば、奉献文の朗唱を通してパンとぶどう酒から聖体の秘跡がつくられる、あるいは十字架を切りながら祝福の祈りを唱えると祝福がもたらされる、と考える教会の立場を指す。

#### ◆ことばと結ばれた所作 (典礼行為) としての歌唱

第二バチカン公会議では「行動的参加 *actuosa participatio*」が謳われ、そのために典礼教育が重要であると指摘された(『典礼憲章』14-20 条)。典礼における歌唱は所作(典礼行為 *actio liturgica*) であり、しかもことばと結ばれた所作である。この側面を『典礼憲章』から眺めてみたい。

「行動的参加を推進するため、会衆の応唱 (*populi acclamations*)、答唱 (*responsiones*)、詩編唱和 (*psalmodia*)、交唱 (*antiphonae*)、聖歌 (*cantica*)、さらに種々の行為 (*actiones*) すなわち動作 (*gestus*) と姿勢 (*corporis habitus*) にも配慮しなければならない。また、しかるべきときには、聖なる沈黙 (*sacrum silentium*) を守らなければならない。」(『典礼憲章』30 条) →歌唱は典礼行為の柱として位置づけられている。

「普遍教会の音楽の伝統は、諸芸術のほかの優れた表現の中でも、はかりしれない価値観をもつ宝庫をなしている。それは、とくにことばと結びついた聖歌 (*cantus sacer qui verbis inhaeret*) が、荘厳な典礼の必要ないし不可欠の部分となっているからである。[...] 教会音楽は、祈りをより味わい深く表現したり心の一致を促進したりすることによって、また、さらに荘厳さを加えて聖なる祭儀を豊かにすることによって、典礼行為と固く結びつけば結びつくほど、いっそう聖なるものとなる。(Musica sacra tanto sanctior erit quanto arctius cum actione liturgica connectetur) [...]」(『典礼憲章』112 条)

「[...] 司教と他の司牧者は、歌によって執り行われるいかなる典礼行為においても (*in qualibet actione sacra in cantu*) [...], 信者の集会全体が、その固有の行動的参加を表すことができるよう注意しなければならない。」(『典礼憲章』114 条)

「教会は、グレゴリオ聖歌をローマ典礼に固有の聖歌として認める。したがって、他の同等のものがある場合も、これは典礼行為において首位を占めるべきである (*in actionibus liturgicis, [...] principem locum obtineat*).」(『典礼憲章』116 条) →グレゴリオ聖歌が「ことばと結びついた聖歌」であるため。『典礼憲章』112 条参照。

#### ◆所作は祈りを高める

「祈る者は嘆願にふさわしいように体の部分をふさわしく整える。跪いたり、両手を伸ばしたり、地面に平伏したり、あるいは何か目にみえる所作を行うとき、しかし、彼らの目にみえない意思と心の意向を神はご存知である。人間の霊は神に向いており、実はこれらの所作を必要としない。しかし、これらのしるしを通して、人は、祈りと哀願へと自身が謙虚にまた熱く駆り立てられるのである。これらの所作は、先行する霊の動きを通してでなければ生じえないのであるから、どうしてなのかわからないが、こうした所作が外見上目に見える仕方で行われるとき、所作を引き起こす内的で目には見えない心の傾きが増す (*ille interior invisibilis qui eos fecit augetur*)。この理由で、先行するがゆえに外的なしるしがもたらされるはずの心の傾きは、外的なしるしがおこなわれていっそう増す (*cordis affectus, qui ut fierent ista praecessit, quia facta sunt crescit*)」ので

ある。抑制されたり、制限されてしまうなら、彼は手足を使ってこうした所作を行うことができなくなってしまうが、かといって内なる人 (interior homo) までが祈っていないということにはならない。その人は、悔恨を感じずる最も密やかな部屋で、神の御目の前に差し出されているのだ。」(アウグスティヌス『死者への配慮について』V,7, アマラリウス『典礼学概論』III,28,6-7, J.-C. シュミット, 松村剛訳『中世の身ぶり』みすず書房, 1996年, 295-301 ページ参照。)

### 3. ミサの式次第に即して

#### ◆ミサ

ミサは、イエス・キリストが弟子たちとともにした「最後の晩餐」の記念祭儀である。世界中のキリスト教会で古くから祝われている礼拝式である。ミサのなかで信者はともに聖書のことばを聴き、ともに祭壇を囲んで最後の晩餐を儀礼的に模倣し記念することを通して、キリストの臨在への信仰を確認し合う。特に聖体拝領により、キリストと深く結ばれ、神の愛と恵みに与ると信じられている。「ミサ missa」とは「派遣された」という意味で、司祭の唱える最後の言葉「行きましょう (あなたたちは派遣された) *ite, missa est*」に由来する。

#### ◆ミサの構造

ミサは4つの部分から構成されている。プロローグとエピローグに相当する「開祭」と「閉祭」および「二つの食卓」、すなわち「ことばの食卓 *mensa verbi Dei*」(『典礼憲章』51条)と「主のからだの食卓 *mensa corporis Domini*」(同48条)からなるとされる。「ことばの食卓」では、朗読台から告げられる聖書の言葉を(あたかも食物を味わうかのように)かみしめる。「主のからだの食卓」では、祭壇の上に供えられるパンとぶどう酒を囲んで祈り、食する。ミサの中心部分である。

- ① 「開祭」
- ② 「ことばの典礼」 (ことばの食卓)
- ③ 「感謝の典礼」 } (パンとぶどう酒の食卓)
- 「交わりの儀」 }
- ④ 「閉祭」

### 4. おわりに

#### 主要参考文献

- ・日本カトリック司教協議会訳・監修『カトリック教会のカテキズム』(2002年, カトリック中央協議会)
- ・第2バチカン公会議文書公式訳改訂特別委員会監訳『第二バチカン公会議公文書 改訂公式訳』(2013年, カトリック中央協議会)
- ・日本カトリック典礼委員会編『ミサの式次第 (増補版)』(カトリック中央協議会, 2014年)
- ・J.-C. シュミット, 松村剛訳『中世の身ぶり』(みすず書房, 1996年)
- ・学校法人上智学院新カトリック大事典 編纂委員会編『新カトリック大事典』(全4巻+別巻, 研究社, 1996-2010年)

## ミサの式次第

### ① 「開祭」

■入祭の歌（入祭唱 Introitus）

あいさつ

回心

◆あわれみの賛歌（Kyrie）

◆栄光の賛歌（Gloria）

集会祈願（Collecta）

### ② 「ことばの典礼」

第一朗読

■答唱詩編（昇階唱 Graduale）

第二朗読

■アレルヤ唱（Alleluia）／詠唱（Tractus）

（続唱 Sequentia）

福音朗読（Evangelium）

説教

◆信仰宣言（Credo）

共同祈願

### ③ 「感謝の典礼」

祭壇の準備

奉納行列

■奉納の歌（奉納唱 Offertorium）

パンを供える祈り

カリスを供える祈り

清め

奉納祈願（Oratio super Oblata）

奉献文（Canon）

叙唱（Praefatio）

◆感謝の賛歌（Sanctus / Benedictus）

エピクレーシス（聖霊の降下を求める祈り）

秘跡制定句（最後の晩餐におけるイエスの言葉）

死者のための祈り

生者のための祈り

栄唱

「交わりの儀」

主の祈り

平和のあいさつ

◆平和の賛歌（Agnus Dei）

拝領前の信仰告白

聖体拝領

■拝領の歌（拝領唱 Communio）

拝領祈願（Oratio post Communionem）

### ④ 「閉祭」

お知らせ

派遣の祝福

閉祭のあいさつ

「司祭：Ite, missa est. 会衆：Deo gratias.」

退堂